

東京日々新聞

九百八十四号



惠齋
芳幾

吉原角所の遊樂鴉本のおとこは頂遊女解散の令けしき其ころ買ひ
別深の谷とて預曲の若名安次郎と妻と多う夫婦と老母と共々居るが
安次郎は今年世三才で老母は七十歳あり家業は魚屋を病身あり上り薄
元手多れ追々朝の煙りも立ちのゆるむを妻はとて熟談の上膝まき中を
餘儀を離縁の父許に在りて免角安次郎は事と縁何處に活計を立させ
まは六年老るる姑の飢渴も及んぬと歎き暮せども女的身も二風も
無けぬ愛でこそ夫の爲に身を賣る身あらん世風と思ひ
古びなさを感ずるを殊に賣り方も手馴れれば先月
廿八日鶴本不相談整ひ一度の務と出稼の給金六拾圓の前
借りの内十圓を夜親手道具と求免残る五拾圓と
安次郎方へ送り是と家業の本錢にて活計を立て老母と過せ
玉と云遣ひ自ら憂き川竹の流るる身を沈めけり安次郎母子も深き
義の感涙と共には是を受取り借財の方より一度責め入れ彼の五千
圓も忽ち残りかゝるふあり以前は替らぬ其日も渡り来る程多れば折
角かゝるや賣りて是と深き情愛も功無く無く老母もその難儀とせざるを憂く
かゝる對一面目の世に在りて申すも沙洲も沈まん染めやらんと思ふ度くあはれ
切の胸と堪へ今度逢ひてその親切と謝り且へ懐かしの愛を情此世の暇と善くと去れ九日の夕や
安次郎母に向て吉原に住ていさよ逢ひ此間の禮と云つて来たのと思ふ事依ると今夕晩の泊り来る
皆知るせんと云は置き速く鴉本に手り娼妓らと買ひ揚げ快々酒食頓て兩人ともお臥
たり其夜の曉のさうさ叫びるる声よがら驚くま見よ安次郎は咽喉突き俯伏し
直と取り違ひ誰ぞ早くと声立てる家内中の騒ぎ速く手當死の死に至らぬ也



具足屋極
ホリエイ

